

性的マイノリティ (LGB+) に関する 性的アイデンティティ発達研究の概観 ー段階モデルからマイルストーン研究への潮流変化に着目してー

上田 裕也

1. 問題と目的

(1) 性的マイノリティへの心理的支援

近年、性的マイノリティに対する社会的関心が高まり、その心理的支援の必要性についても認識されるようになってきた。これまでの疫学的研究によれば、性的マイノリティは、異性愛者に比べてメンタルヘルスの問題を多く抱えていることが国内外で示されている。例えば、同性愛者は、異性愛者と比べて、うつ病、不安障害、自殺未遂、物質依存などの割合が高い (eg. Blosnich et al, 2016; Cochran & Mays, 2000; Fredriksen-Goldsen et al, 2013; 日高, 2024; Sandfort et al., 2001)。メンタルヘルスの問題をめぐる異性愛者と性的マイノリティの間の差異は、青年期、成人期、高齢期の生涯に渡って存在する。Meyer (2003) は、この原因をマイノリティ・ストレスによるものとして理論化した。マイノリティ・ストレスとは、「スティグマのある社会的カテゴリーに属する個人が、マイノリティの立場にあることが原因で受ける過剰なストレス」と定義される。性的マイノリティは、慢性的に差別や偏見・スティグマ、ハラスメント、暴力やいじめのリスクにさらされており (遠位 [distal] マイノリティ・ストレス)、こうしたスティグマが内在化されることで、否定的な出来事を自分のせいであると感じて生じるストレス (近位 [proximal] マイノリティ・ストレス) を抱えている (Meyer, 2003)。こうした背景のもと、性的マイノリティは、異性愛者と比べて、メンタルヘルスサービスの利用率が高いことが知られている (Cochran et al, 2003; Liddle, 1996)。その際、性的マイノリティのクライアントの満足度は、性的マイノリティ特有の問題に対するセラピストの理解度に関係するとされ (Liddle, 1996)、心理臨床家は性的マイノリティの心理臨床実践にあたり、マイノリティ・ストレスを含む特有の問題に配慮することが求められる (APA, 2021)。

本稿では、性的マイノリティのうち、これまで研究蓄積の多い同性愛者 (レズビアン、ゲイ)、および両性愛者 (バイセクシュアル) という、性的指向にかかるマイノリティ (LGB+) のアイデンティティを扱うこととする。

(2) 性的アイデンティティ発達モデルの有効性

欧米における性的マイノリティの心理臨床実践では、性的マイノリティがどのように性的アイデンティティの発達過程を歩むのかを示した性的アイデンティティ発達モデルがしばしば援用されてきた (平田, 2014)。LGB+にとって、性的アイデンティティの発達過程とは、自分自身の性的指向を受け入れていく過程であり、かつ他者とそれを共有していく過程である (葛西、

2023)。性的アイデンティティ発達モデルのうち、最もよく知られているのは Cass (1979, 1984) の同性愛者モデルである。Cass (1979, 1984) によれば、性的アイデンティティの発達は、概ね、自らの行動や関心が同性愛的であることに気づいて混乱し孤立感を感じるが、他の同性愛者と接触していく中で自身が同性愛者であることを徐々に受容し、同性愛者であることを肯定的に意味づけて自分のアイデンティティとして統合していくという過程を辿る。このモデルは Erikson (1959/1973) の漸成説に基づくライフサイクル論（心理・社会的発達段階）のように、発達課題の解決を通じて一連の発達段階を順に進んでいくアプローチが採られている。

心理臨床実践において、性的アイデンティティ発達の理解は次の点で重要である。第1に、クライアントの問題を適切にアセスメントするのに役立ち、クライアントが現在直面している発達課題を知ることによって今何が治療的なのかを明確化できる（葛西, 2023）。クライアントがどの発達段階にいるのかを適切にアセスメントできれば、今必要な資源や情報を知ることができ、心理療法のための対応方針を立てやすくなると考えられる。第2に、性的マイノリティが、性的アイデンティティに肯定的な見方を持つことは、良好なメンタルヘルスを維持する上で重要であるためである。肯定的な見方とは、例えば、性的マイノリティであることを自分自身あるいは周囲からも受け入れられ、劣っているという感覚を持たず、ありのままでいられるような見方である。性的マイノリティが、性的アイデンティティを自らの全体的なアイデンティティに肯定的に統合できれば、うつ病、不安などを予防し、自尊心の向上につながるほか（Rosario et al, 2011）、自分の性的アイデンティティに対する肯定的な見方を持つことがストレスからの保護要因として機能することが指摘されている（Fredriksen-Goldsen et al., 2015; Kosciw et al, 2015）。性的マイノリティの中には、レジリエンスを発揮したりストレス・コーピングによってうまく対処する者も少なくない（Meyer, 2015）。性的マイノリティの心理臨床実践において、肯定的な性的アイデンティティを持てるよう支援したり、ストレス・コーピングに関する心理教育を行うことは、性的マイノリティのメンタルヘルスの問題の予防に役立つ可能性があると考えられる。

(3) 多様な個人差の検証を目指したマイルストーン研究の増加

Cass (1979, 1984) のモデルの登場以降も、さまざまな段階モデルが提案されたが、これらモデルは心理臨床実践で有用である一方、実際には必ずしもモデルに当てはまらない臨床例も少なくなく、段階モデルは過度に単純で、実証的に十分検証されていないという批判がなされてきた（eg. Diamond, 2006; Eliason & Shope, 2007; Kenneady & Oswalt, 2015; Savin-Williams & Cohen, 2015）。段階モデルは一連の発達段階を順に進む理想的な経路を示すが、このモデルに該当しない臨床例は特定の状況における一例として扱われていた（Floyd & Stein, 2002）。こうした段階モデルに代わり、1990年代より、性的マイノリティの歩むアイデンティティ発達過程の個人差を多様に描くため、性的マイノリティの多くが経験する重要なライフイベントをマイルストーンとして位置付けて、そのタイミングや順序を調査するマイルストーン研究が増加してきた。マイルストーン研究は、普遍的な段階モデルのように単一あるいは理想的な経路を想定していない。段階モデルで示された発達課題は引き続きマイルストーンとして扱われるが、マイルストーンを経験するタイミングと順序には個人差が存在することに着目し、その多様なパターンの要因の検証を目指すことがマイルストーン研究の目的である（Hall et al, 2021）。

本稿では、これまでの性的アイデンティティ発達研究を概観した上で、段階モデルからマイルストーン研究への潮流変化に着目して、これまで段階モデルに対してどのような批判がなされてきたかを整理し、なぜマイルストーン研究が増加してきたのかを考察する。その上で、今後の研究課題を明らかにすることを目的とする。本稿は、心理臨床実践において参照されることの多い性的アイデンティティ発達研究の概観および検討を通じて、クライアント理解に資するという意義があると考えられる。

2. 性的アイデンティティ発達研究の潮流

性的アイデンティティ発達研究は、過去 100 年の間に発展した。本章では、20 世紀初頭のフロイトの理論から扱い、その後の精神分析家による同性愛の病理化、および脱病理化を経て Cass の段階モデルの登場、続いてさまざまな段階モデルの提案、近年のマイルストーン研究の登場までを概観する。

(1) 精神分析における同性愛の病理化

20 世紀の大半において、同性愛の欲求、行動、アイデンティティは、異性愛規範社会から逸脱した異常なものと見なされてきた。フロイトは、心理学的発達理論において、同性愛は心理学的発達過程で生じる問題の結果であると理論化した (Freud, 1905)。人間は生来的に両性性 (bisexuality) を有し、幼少期の両親との経験によって異性愛者にも同性愛者にもなると述べている。例えば、男子が父親ではなく母親に対して過度に愛着を持って同一視することになること、男子が強い去勢不安を感じて、(去勢されている) 女性を拒絶することになること、男子が自己愛的な自己陶醉感から自分に似た魅力の対象を選ぶようになることなどの結果と考えた。フロイトはその後の著作で、同性愛は悪徳でも墮落でも病気でもないと主張している (Freud, 1935)。むしろ、同性愛は、幼少期の心理学的発達における未解決の精神内葛藤によるセクシュアリティの非典型的変化であると考えていた。

しかし、その後の精神分析家たちは、同性愛は病的なものと捉えて、精神分析で同性愛を治療できると主張した (Drescher, 2015)。Rado (1940, 1949) は、人間は生来的に両性性を有するというフロイトの前提を否定し、異性愛が唯一の自然で正常な形態であると主張した。同性愛は不十分な子育てによって引き起こされるもので、異性を病的に回避するものとして認識された。Rado の理論化は、後の Bieber や Socarides に影響を与えた。Bieber (1962, 1967, 1969) は、男性同性愛は、男子が所有的で過度な関与をする母親と、敵対的または遠い関係の父親を持つことによって引き起こされると主張した。男子は母親と絆で結ばれることで、男らしさの発達を妨げられ、その結果、同性愛に導かれるとされた。女性同性愛については、Bieber (1967, 1969) は、母親が娘に対して温かさや愛情をほとんど示さなかったり、娘にきれいな服を着せず、料理や家事のスキルを教えないなどの行動を取り、母親が娘を過度に拒絶したり批判的であるなど、さまざまな親子関係の力学によって引き起こされ、同性愛に導かれると主張した。Socarides (1968) も、同性愛は病気・倒錯であり、親子間の問題行動が原因であると主張した。このような同性愛に対する病的な見方は、フロイトの理論に取って代わり、1940 年代から 1970 年代にかけて米国の精神医学に影響を与えた。その結果、1952 年に米国精神医学学会 (APA) が発表した DSM-I (Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders. 精神疾患の診断と統計マニ

ュアル)では同性愛は病気として分類された。

(2) 病理化から脱病理化へ

20世紀半ば以降、精神科医や心理学者は病気と分類された同性愛の治療を試みようとしたのに対し、性科学者は異性愛者や健康な同性愛者などを対象に大規模な集団を調査し始めた。Kinseyら(1948、1953)は、同性愛は人間のセクシュアリティの正常な変化であることを提唱し、精神分析とは異なり、非精神病患者のサンプルを用いて、米国では同性愛が珍しくないことを明らかにした。Hooker(1957)は、異性愛者と同性愛者から心理テストの結果を収集し、参加者の性的指向を知らせずに心理的適応を評価するよう心理学者に依頼したところ、心理学者は、異性愛者と同性愛者の参加者を同程度の精神状態と分類し、テスト結果に基づいて異性愛者と同性愛者を区別することができなかった。このことから、Hooker(1957)は、同性愛は本質的に精神病理ではないと結論づけた。一方、1969年にはニューヨークで同性愛への取締りを強化する警察に抵抗したストーンウォール事件が起こり、それを契機に米国でゲイ解放運動が盛り上がった。活動家による抗議の影響も受けながら、1973年、米国精神医学学会は、DSM-IIから同性愛を削除することとなった。

(3) 性的アイデンティティ発達の段階モデル 線形モデル

1970年代から1990年代の性的アイデンティティ発達研究では、アイデンティティの発達は線形で普遍的なものであると考えられ、主に段階モデルに焦点が当てられた。いくつかの段階モデルの中では、先述したCassの6段階の同性愛者モデルが最も広く認識され引用されている。Cassはオーストラリアで同性愛者のクライアントとの心理臨床実践を通じて、クライアントの経験には共通点があることを見出し、モデルを開発した。このモデルでは、性的アイデンティティ発達は個人と環境の間での相互作用を通じて達成されると考えられ、アイデンティティを確立し、完全に統合された自己へ移るためには、一定の順序で段階が踏まれていくと述べている(Cass, 1979)。まず、【第1段階：アイデンティティの混乱】では、自分の恋愛感情、欲求、行動が一般的な異性愛とは異なり、同性愛かもしれないと初めて気づく。それまでは自分を異性愛者だと思っていたが、現在の自分に対する認識との間に乖離が生まれる。【第2段階：アイデンティティの比較】では、自分はおそらく同性愛者だろうという気持ちを受け入れることと、その現実を否定することの間で揺れ動く。自分はおそらく同性愛者だろうと受け入れ、自分と異性愛者との区別が明確になるにつれて、疎外感を感じるようになる。【第3段階：アイデンティティの寛容】では、自分はおそらく同性愛者だろうという気持ちをまだ完全には受け入れられないものの、認め始めるようになる。他の同性愛者と接するようになると、自尊心が高まり、疎外感が減少する。【第4段階：アイデンティティの受容】では、自分の同性愛的なアイデンティティがより明確になり、同性愛者として肯定的な自己イメージを持つようになる。同性愛者の文化に触れたり、同性愛者の友人とのネットワークが増加するようになる。【第5段階：アイデンティティのプライド】では、同性愛者のアイデンティティに誇りを感じ、同性愛者のコミュニティに帰属意識を持つようになる。異性愛者社会における同性愛者に対する扱いに怒りを示すようになり、異性愛者へのカミングアウトも行うようになる。【第6段階：アイデンティティの統合】では、同性愛者のアイデンティティを重要だと考えるが、唯一のアイデン

ティティではなく、自分自身の一側面に過ぎないと捉え、全体的な自分のアイデンティティとして統合する。なお、Cass はその後の研究で、第 1 段階と第 2 段階、第 5 段階と第 6 段階の間での差を見分けるのが臨床上困難であることから、6 段階を 4 段階に凝縮できると考えた (Cass, 1984)。さらに、第 1 段階の前段階として、自分の性的指向を異性愛と想定し、異性愛を標準と捉えて同性愛はマイノリティの存在であると認識する段階が加えられた。(Cass, 1996)。

Cass のモデルを基にした Troiden (1979, 1989) による 4 段階のモデルも引用されることが多い。Troiden (1979) の 4 段階では、気づき、混乱、仮決め、コミットメントという段階を進む。最終段階のコミットメントは誰もが到達するわけではなく、パーソナリティや差別経験などさまざまな要因によって異なるとされる。

これら初期のモデルでは、同性愛者の自認とカミングアウトが重視されていた。Cass に続いて提案された多くの同性愛者の性的アイデンティティ発達モデルは、同性愛の欲求と折り合いをつける直線的な道筋を示し、マイノリティとしてのアイデンティティを受容し、カミングアウトしていくために必要なアイデンティティの変化の過程を説明している (eg. Brown, 2002; Reynolds & Hanjorgiris, 2000)。その後、これらを発展させたモデルでは、性的アイデンティティの個人要素とマイノリティの構成員としての集団要素の両方が考慮され、個人要素と集団要素はそれぞれ発達を歩むものとして分別された (Fassinger & Miller, 1996; McCarn & Fassinger, 1996)。発展モデルが従来モデルと異なる点は、一方向的で直線的な発達ではなく、自分の性的指向への態度、自分と異なる性的指向を持つ人への態度などそれぞれの領域によって発達の進み具合が異なるのを許容していること、アイデンティティ達成の指標としてカミングアウトを設定しないことなどである。

多次元モデル

さらに、性的アイデンティティを、性的魅力、欲求、行動、価値観、人間関係など、セクシュアリティのさまざまな側面の意味と重要性に関する個人の認知的および感情的な理解によって構成されるものとして、性的アイデンティティ発達の複雑さとダイナミクスをよりよく反映するために、従来のモデルを修正した包括的で多次元的な社会構成主義モデルが提案されている。D'Augelli (1994) は、性的アイデンティティは、社会や環境の条件によって一生を通して変遷していくものと考え、6 期の過程を歩むモデルを提案した。6 期の過程では、①異性愛アイデンティティからの脱却、②個人的な性的アイデンティティの発達、③マイノリティの社会的アイデンティティ発達（支援ネットワークの構築）、④マイノリティの子孫になる（親へのカミングアウト）、⑤マイノリティの親密性の発達（パートナーとの関係）、⑥マイノリティ社会に入ること（政治的・社会的活動への関与）が示され、これらの過程を行き来しながら流動的に進むとした。Horowitz & Newcomb (2001) は、さまざまな性的指向のアイデンティティを持つ個人に適用することを意図したモデルを提案した。このモデルでは、性的欲求、行動、アイデンティティを個別に考慮し、性的アイデンティティの継続的な発達を想定している。Dillon ら (2011) は、Marcia (1987) のアイデンティティ発達モデルに基づき、個人および社会のアイデンティティの発達過程を組み込み、それらを柔軟に行き来する多次元的な性的アイデンティティ発達のモデルを提案した。Mohr & Kendra (2011) は、性的アイデンティティは個人の認識だけでなく、信念や感情など多次元構成であることを踏まえ、Mohr & Fassinger (2000) で作成

された性的マイノリティの経験を捉えるための性的指向アイデンティティ尺度を改訂し、多元性のあるアイデンティティという提案について実証的な検討を行った。

以上のように、段階モデルは線形モデルから多次元モデルまでさまざま登場したが、性的アイデンティティ発達における普遍的な経験の共通性に注目している。心理臨床実践の上では、性的マイノリティのクライアントをアセスメントする際に役立つことから、現在もなお有益である。しかし、クライアントの個別性に鑑みた時、臨床的には段階モデルに当てはまらない例が少なくないという批判がなされ、実証研究でも段階モデルの妥当性は限定的にしか見られなかったことから (Kenneady & Oswalt, 2014)、1990 年代以降、性的アイデンティティを形成する際に経験されるマイルストーンを軸にした研究が増加するようになった。

(4) マイルストーン研究の概要

マイルストーンとは、人生の変化点など、人間の発達における重要な時点を示すライフイベントである。LGB+の性的マイノリティにとって重要なマイルストーンとして、例えば、「①同性への性的欲求に初めて気づくこと」、「②自分自身を LGB+と自認すること」、「③友人や家族に初めて性的マイノリティであることをカミングアウトすること」などがある。段階モデルとは異なり、マイルストーン研究では、性的アイデンティティ発達の単一経路や理想的な経路は前提としていない。マイルストーンを経験するさまざまな経路のパターンを調査し、マイルストンのタイミングと順序を形成する要因を捉えようとしてきた (eg. Calzo et al., 2011; Floyd & Stein, 2002; Rosario et al., 1996; Savin-Williams & Diamond, 2000)。

「①同性への性的欲求に初めて気づくこと」および「②自分自身を LGB+と自認すること」というマイルストーンは、性的アイデンティティそのものに関するマイルストーンで、同性への魅力に初めて気づいた年齢、同性との親密な関係を初めて持った年齢、性的マイノリティとして初めて自認した年齢などが測定される。研究では、ゲイやバイセクシュアルの男性は、レズビアンやバイセクシュアルの女性よりも若い年齢で性的アイデンティティの重要なマイルストーンを経験することが明らかになっている (D'Augelli & Grossman, 2001; D'Augelli et al, 2008; Savin-Williams & Diamond, 2000)。人種・民族間の差異については、白人・黒人・ラテン系の間では年齢に有意な差がなかったという研究もあれば (Rosario et al., 2004)、ラテン系は白人や黒人よりも年齢が有意に若かったという研究もあり (Dubé & Savin-Williams, 1999)、さまざまである。他方、ゲイ・レズビアン・バイセクシュアルの間では、バイセクシュアルはゲイ・レズビアンよりも気づくのが数年遅れるという結果が複数ある (eg. Floyd & Stein, 2002; Maguen et al, 2002)。若い世代のレズビアンは、高齢世代よりも早い年齢で性的アイデンティティのマイルストーンを経験しており (eg. Grov, 2006)、これは、性的マイノリティに対する社会的受容の高まりにより、女性も自認しやすくなったと説明できる可能性がある (Baunach, 2012)。

「③友人や家族に初めて性的マイノリティであることをカミングアウトすること」というマイルストーンは、多くの場合、家族、性的マイノリティの友人、異性愛者の友人にカミングアウトする年齢で測定される。若い世代では、初めてカミングアウトする年齢は高齢世代よりも早いことが分かっており、これも性的マイノリティへの認知と受容が高まっていることを反映していると考えられる (eg. Dubé & Savin-Williams, 1999; Savin-Williams & Diamond, 2000)。カミングアウトのマイルストーンでは、性別、性的指向、人種・民族間における年齢の差異は見られな

かった。ただし、人種・民族の違いは、誰に自分のアイデンティティをカミングアウトするかには影響を与えることが分かっている。白人は、同じ人種・民族だけでなく、多くの人に性的アイデンティティを明らかにしていることが示唆されている（eg. Grov, 2006; Rosario et al, 2006）。

マイルストーン研究では、マイルストーン間の時間間隔を調査し、性的マイノリティの発達における個別性にどのような影響を与えているか、またその要因についても検討されてきた。例えば、反同性愛的な環境で生きている性的マイノリティは、マイノリティ・ストレスを強く受ける体験が多くなることから、自分の性的アイデンティティを初めて認識してから初めて開示するまでの時間を躊躇わせ長くさせる一因となる可能性がある（D'Augelli et al, 1998; Parks, 1999）。これらマイルストーン間の時間間隔は、若い世代の方が高齢世代よりも短いことが明らかになっており、自分が異性愛者ではないというアイデンティティに最初に疑問を抱いてから、それを受け入れるまでの時間についても同様の傾向が見られている（Parks & Hughes, 2007）。女性は、自分の性的アイデンティティを初めて認識してから初めて開示するまでの時間が短いことも明らかになっている（D'Augelli & Grossman, 2001; Savin-Williams & Diamond, 2000）。

3. 考察

(1) 段階モデルへの批判

ここまで性的アイデンティティ発達研究の歴史的変遷を概観してきた。本章では、段階モデルに対してどのような批判がなされてきたかを整理し、なぜマイルストーン研究が増加してきたのかを考察する。

Cass の段階モデルが提案されて以降、いくつかの批判がなされてきたが、第 1 に、漸進的に進むとする線形の段階モデルは過度に単純であるという批判が多かった。性的アイデンティティの発達がさまざまな時点から開始する可能性や、さまざまな経路を辿る可能性が考慮されておらず、単一の経路しか示されていないことが、線形モデルの限界として指摘された（eg. Brown, 1995; Eliason & Schope, 2007; Savin-Williams & Diamond, 2000; Weinberg, 1984）。Sophie（1986）は、レズビアンの性的アイデンティティ発達の研究において、レズビアンの経験は多様で、線形モデルには適合しないことを明らかにした。Horowitz & Newcomb（2001）も段階モデルを批判し、同性愛者はすべての段階を順番に進んでいくわけではなく、段階を再び下がったり、複数の段階に同時に進むこともあることを示した。心理臨床実践の立場からみれば、普遍的なモデルに当てはまらない個人差が存在することは当然ありうるため、こうした批判は妥当であると考えられる。この点については心理臨床家である Cass も当時から認識しており、性的マイノリティにはさまざまな個人あるいは置かれている状況が存在するため、このモデルがすべての人に当てはまることは意図されておらず、6 つの発達段階を直線的に順に経ていくわけではないと述べている（Cass, 1979, 1984）。しかし、Cass の段階モデルが多数引用されるようになるにつれ、そうした Cass の留意点は置き去りにされ、単純明快なモデルのみが一人歩きして、誤解を伴って一部に広まっていった面は否定できないように思われる。

第 2 に、性的指向の多様性に対して十分対応できていないという批判がある。近年注目されて研究が増加している概念として、性的指向の揺らぎ（sexual fluidity）がある。Diamond（2006, 2008）によれば、性的指向は時間や社会状況、経験によって揺らいだり変化することがあり、

それを実証する研究が増えている。現在提案されている多くの段階モデルでは、誰もが唯一の性的指向のアイデンティティを持つと仮定されているため、性的指向の揺らぎの概念には十分対応できていない (Savin-Williams, 2011)。このほか、性的マイノリティの中には、例えば同性愛的行為を行うもののゲイとしてのアイデンティティは持たない MSM (Men who have Sex with Men) などの人々も存在するが、同様に、単一的なモデルではこうした人々の経験には対応できていない (Malcom, 2008)。

第3に、ほとんどの段階モデルは、欧米の白人同性愛者を調査対象として研究されたもので、バイセクシュアルなど同性愛 (レズビアン、ゲイ) 以外の性的指向、男女間の差異、人種・民族・宗教・地域による差異など、さまざまな属性が交差する交差性 (intersectionality) に十分対応していないという批判がある (eg. Chun & Singh, 2010; Floyd & Bakeman, 2006; McCann & Fassinger, 1996; Rowen & Malcolm, 2003)。交差性については、さまざまな組合せが考えられることから、まだほとんど研究されていない領域も多く、今後さらに研究が必要である (Savin-Williams & Cohen, 2015)。

第4に、性的アイデンティティ発達研究の多くは思春期や青年期を調査対象としている中、現代の若者世代を取り巻く性的多様性に対する態度の変化に対応していないという批判がある。特に、欧米を中心とする先進諸国では、社会文化的背景が変化し、若者世代は性的多様性を受容しやすくなり、かつての段階モデルが適用しにくくなっている (Savin-Williams, 2005)。時代の変化とともに、モデルも変化しなければならないという指摘である。

このように、段階モデルに対する批判がなされ、段階モデルの妥当性を示す実証研究も少ないことから、段階モデルに変わって、マイルストーン研究が増加するようになった。

(2) マイルストーン研究登場の背景

段階モデルへの批判をまとめると、Cass 以降もさまざまなモデルが提案されたが、調査対象が限定的だったため、臨床的にも研究の上でも、時代とともに明らかになった性的マイノリティの多様性に対応できなくなった結果であると考えられる。つまり、なぜマイルストーン研究が増加したのかという問いに対する答えは、初期モデルが捉えきれていなかった多様性が明らかになってきたためであると考えられるが、では、なぜ多様性が生じたのか、あるいは可視化されるようになったのかについて論じたい。

第1に、1970年代に米国でゲイ解放運動が広がり、同性愛が脱病理化されて以降、性的マイノリティを取り巻く社会環境は急速に変化し、以前と比べて多様性への受容が広がっていったことが考えられる。心理学分野においても性的マイノリティをめぐる研究は増加しているほか、欧米諸国では同性婚をはじめとする重要な法制度の変化が生じている (APA, 2021)。

第2に、性的マイノリティの研究が始まった当初は、メンタルヘルスの問題を抱え、メンタルヘルスサービスを求めた臨床群が調査対象となることが多く、サンプルに偏りがあったことが指摘される (Savin-Williams, 2005)。当時は同性愛が DSM 上は脱病理化されたばかりで、研究者の多くは性的マイノリティとメンタルヘルスの問題を関連付けることに関心を持っていた (Savin-Williams & Cohen, 2015)。また、当時は性的マイノリティに対する偏見や差別が厳しく、ほとんど不可視的な存在だったため、調査協力者を募るのは困難だったという事情も考えられる。その後、時代の変遷による性的マイノリティの可視化とともに、より代表的で多様な母集

団が調査されるようになったほか、インターネットの広がりという調査手段の拡大も貢献して、より実態に即したサンプルが調査されるようになった。そうした中、白人同性愛者以外のさまざまな属性の交差性を持つ性的マイノリティの存在が明らかになり、その研究の必要性が認識されるようになった。

第3に、この間、ライフスタイルが多様化する時代背景のもと、発達研究分野において、個人の普遍的な規則性を検討するライフサイクル論から、個人がさまざまな経路で重要なライフイベント（マイルストーン）を経験する多様性を捉えようとするライフコース論が注目されるようになった。ライフコース論では、個人が時間の経過の中で演じる社会的に定義された出来事や役割の配列に着目する立場から、個人の発達には社会文化的・歴史的な文脈が重要な影響を与えるという視点を重視している。サンプリングにおいては対象者の歴史的な文脈を捉えるために、一定の暦年時間においてある出来事を経験した人の集団（出生コホート）を扱うことが多い（Elder, 1998/2003）。Elder は、米国社会が成熟し個人の生き方が注目されるようになった1970年代にライフコース論を実証的に示した研究者で、ライフコース論の先駆者として知られている。こうしたライフコース論の登場は、性的マイノリティ研究者の関心とも合致し、人文社会科学における方法論の潮流変化もマイルストーン研究が増加した背景の1つと考えられる。

マイルストーン研究の増加により、経験されるマイルストーンの順序やタイミングは一様ではなく多様性があることが示されるようになった。例えば、周囲へのカミングアウトを行うというマイルストーンを早期に経験した者は、偏見と差別に晒される期間が長くなることを背景に、自殺念慮との間に相関があることが知られるようになった（D'Augelli & Grossman, 2001）。このほか、属性ごとの性別、人種・民族、性的指向、出生コホート間の比較ができるようになり、交差性による差異が明らかになりつつある。これら多様なパターンの存在は、生物学的、心理学的、社会的、文化的な要因に影響されていることが推測されるが、まだ明らかになっていないことは多く、さらなる研究が求められる。

なお、マイルストーンという概念は、発達科学では馴染みのあるもので、例えば、子育てにおいて子どもの発達状況を確認する上で、母子手帳にも目安として記載されている。ただし、この場合、歩く、話すなどの身体機能面に着目したマイルストーンが確認されることが多く、その達成時期には個人差があるものの、発達マイルストーンの順序は基本的には変わらない。これに対し、性的アイデンティティ発達は、個人と環境の間での相互作用が強く影響して達成されるもので、近年のマイルストーン研究で明らかになりつつあるようにマイルストーンの順序にも多様性があることに特徴があると言える。

(3) わが国における研究

わが国では、心理学の分野ではマイルストーン研究はほとんどみられないが、行動疫学の分野では、性的マイノリティを対象とした1万人規模の全国インターネット調査により、10代から50代以上の幅広い年代の回答者からデータを収集した日高（2024）の経年の研究がある。日高（2024）によれば、性的マイノリティが初めて自分の性的指向に気づいた年齢は13才だった。これは海外の研究結果と比べて大きな差はない。さらにこれは1999年と2019年の調査の両方においてほぼ変わらないため、再現性のあるデータとなっている。他方、マイルストーンについては、1999年の調査で、順序と年齢が明らかになっている。ただし、この間も、わが国におけ

る性的マイノリティを取り巻く状況は大きく変化し、社会的認知や受容が広まっていることを踏まえると、現時点では何か変化が見られるかもしれない。また、出生コホート別に見た研究はないため、世代別の特徴がさらに浮かび上がるかもしれない。このほか、心理カウンセリング・心療内科・精神科のいずれかを受診した経験は回答者全体の 41.2%と、わが国においても性的マイノリティのメンタルヘルスサービスへの潜在的ニーズが多くあることが示唆されている（日高, 2024）。

4. 今後の課題

近年登場したマイルストーン研究は、単純な段階モデルを超えて、発達の多様なパターンの存在を明らかにし、普遍性から個性へ少しでも接近することを目的とした研究方法であるといえる。さまざまな研究が行われる中、マイルストンの種類や定義もさまざまで、研究者によって共通のものと異なるものが混在しほとんど統一されていないことは、比較研究を進める上で今後の課題と言える。例えば、性行為の経験を調査する際、調査協力者がどのような行為を性行為と理解するかはさまざまである。さらに、マイルストーン研究の増加により、さまざまなパターンが存在することが明らかになってきたものの、依然として欧米における研究が中心であるため、地域、社会文化、人種・民族など、交差性によってマイルストンのタイミングや順序がどのように変化するのかについてはまだほとんど知られていない（Savin-Williams & Cohen, 2015）。わが国における研究はほとんど見当たらないため、わが国でも研究の必要性が考えられる。また、欧米の研究結果を直ちにわが国に適用できない点については留意が必要である。

なお、心理臨床実践において、性的アイデンティティ発達の段階モデルはその有効性からしばしば援用されてきたように、クライアントの普遍的な発達過程を示すという意味で心理療法ではなお価値は失われていない。心理臨床家は、単にモデルに当てはめるのではなく、その有効性と限界を自覚しながら、マイルストーン研究で明らかになりつつあるクライアントの個性を常に意識し、クライアントに資する心理臨床実践を心がけていくことが重要である。

引用文献

- American Psychological Association (2021). APA Guidelines for Psychological Practice with Sexual Minority Persons.
- Baunach, M. (2012). Changing same-sex marriage attitudes in America from 1988 through 2010. *Public Opinion Quarterly*, 76(2), 364-378.
- Bieber, I. (1962). *Homosexuality -A Psychoanalytic Study of Male Homosexuals*. United States: Basic Books.
- Bieber, I. (1967). "Homosexuality," In A. M. Freedman & H. Kaplan (Eds.), *Comprehensive Textbook of Psychiatry*. (pp.963-976). United States, Williams and Wilkins.
- Bieber, I. (1969). Homosexuality. *The American Journal of Nursing*, 69, 2637-2641.
- Blosnich, J. R., Nasuti, L. J., Mays, V. M., & Cochran, S. D. (2016). Suicidality and sexual orientation: Characteristics of symptom severity, disclosure, and timing across the life course. *American Journal of Orthopsychiatry*, 86(1):69-78.
- Brown, L. S. (1995). Lesbian identities: Concepts and issues. In A. R. D'Augelli & C. J. Patterson (Eds.), *Lesbian, gay, and bisexual identities over the lifespan: Psychological perspectives* (pp.3-23). New York, NY: Oxford University Press.
- Brown, T. (2002). A proposed model of bisexual identity development that elaborates on experiential differences of women and men. *Journal of Bisexuality*, 2, 67-91.
- Calzo, J. P., Antonucci, T. C., Mays, V. M., & Cochran, S. D. (2011). Retrospective recall of sexual

- orientation identity development among gay, lesbian, and bisexual adults. *Developmental Psychology*, **47**.
- Cass, V. C. (1979). Homosexuality identity formation: A theoretical model. *Journal of Homosexuality*, **4**, 219-235.
- Cass, V. C. (1984). Homosexual identity formation: testing a theoretical model. *The Journal of Sex Research*, **20**, 143-167.
- Cass, V. C. (1996). "Sexual orientation identity formation: A Western phenomenon," In R. P. Cabaj & T. S. Stein (Eds.), *Textbook of Homosexuality and Mental Health* (pp.227-251). Arlington, VA: American Psychiatric Association.
- Chun, K. Y. S., & Singh, A. A. (2010). The bisexual youth of color intersecting identities development model: A contextual approach to understanding multiple marginalization experiences. *Journal of Bisexuality*, **10**, 429-451.
- Cochran, S. D. & Mays, V. M. (2000). Relation between psychiatric syndromes and behaviorally defined sexual orientation in a sample of the U.S. population. *American Journal of Epidemiology*, **151**, 516-523.
- Cochran, S. D., Sullivan, J. G., & Mays, V. M. (2003). Prevalence of mental disorders, psychological distress, and mental health services use among lesbian, gay, and bisexual adults in the United States. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, **71**(1), 53-61.
- D'Augelli, A. R. (1994). Identity development and sexual orientation: Toward a model of lesbian, gay, and bisexual development. In E. J. Trickett, R. J. Watts & D. Birham (Eds.), *Human diversity: Perspective on people in context* (pp.312-333). San Francisco, CA: Jossey-Bass.
- D'Augelli, A. R., & Grossman, A. H. (2001). Disclosure of sexual orientation, victimization, and mental health among lesbian, gay, and bisexual older adults. *Journal of Interpersonal Violence*, **16**(10), 1008-1027.
- D'Augelli, A. R., Grossman, A. H., & Starks, M. T. (2008). Gender atypicality and sexual orientation development among lesbian, gay, and bisexual youth: prevalence, sex differences, and parental responses. *Journal of Gay and Lesbian Psychotherapy*, **12**(1-2), 121-143.
- D'Augelli, A. R., Hershberger, S. L., & Pilkington, N. W. (1998). Lesbian, gay and bisexual youth and their families: disclosure of sexual orientation and its consequences. *American Journal of Orthopsychiatry*, **68**(3), 361-371.
- Diamond, L. M. (2006). What we got wrong about sexual identity development: Unexpected findings from a longitudinal study of young women. In A. Omoto, & H. Kurtzman (Eds.), *Sexual orientation and mental health: Examining identity and development in lesbian, gay, and bisexual people* (pp.73-94). Washington, DC: American Psychological Association Press.
- Diamond, L. M. (2008). *Sexuality fluidity: Understanding women's love and desire*. Cambridge, MA: Harvard University Press.
- Dillon, F. R., Worthington, R. L., & Moradi, B. (2011). Sexual identity as a universal process. In S. J. Schwartz, K. Luyckx, & V. L. Vignoles (Eds.), *Handbook of Identity Theory and Research Vols 1 & 2* (pp.649-670). New York, NY: Springer.
- Drescher, J. (2015). Out of DSM: depathologizing homosexuality. *Behavioral Sciences*, **5**, 565-575.
- Dubé, E. M., & Savin-Williams, R. C. (1999). Sexual identity development among ethnic sexual-minority male youths. *Developmental Psychology*, **35**(6), 1389-1398.
- Elder, H. Jr. & Janet, Z. (Eds.) (1998). *Methods of life course research: Qualitative and quantitative approaches*. Sage Publications.
- 正岡寛司・藤見順子 (訳) (2003). *ライフコース研究の方法—質的ならびに量的アプローチ*. 明石書店.
- Eliason, M. J., & Schope, R. (2007). Shifting sands or solid foundation? lesbian, gay, bisexual, and transgender identity formation. In I. H. Meyer, & M. E. Northridge (Eds.), *The health of sexual minorities: Public health perspectives on lesbian, gay, bisexual, and transgender populations* (pp.3-26). New York, NY: Springer.
- Erikson, E. H. (1959). *Identity and the life cycle*. 小此木啓吾 (訳) (1973). 自我同一性. 誠信書房.
- Fassinger, R. E., & Miller, B. A. (1996). Validation of an inclusive model of sexual minority identity formation on a sample of gay men. *Journal of Homosexuality*, **32**, 53-78.
- Floyd, F. J., & Bakeman, R. (2006). Coming-out across the life course: Implications of age and historical context. *Archives of Sexual Behavior*, **35**, 287-296.
- Floyd, F. J., & Stein, T. S. (2002). Sexual orientation identity formation among gay, lesbian, and bisexual youths: multiple patterns of milestone experiences. *Journal of Research on Adolescence*, **12**, 167-191.
- Fredriksen-Goldsen, K. I., Kim, H. J., Barkan, S. E., Muraco, A., & Hoy-Ellis, C. P. (2013). Health

- disparities among lesbian, gay, and bisexual older adults: results from a population-based study. *American Journal of Public Health*, **103**, 1802-1809.
- Fredriksen-Goldsen, K. I., Hyun-Jun Kim, Chengshi Shiu, Jayn Goldsen, & Charles A. Emler. (2015). Successful Aging Among LGBT Older Adults: Physical and Mental Health-Related Quality of Life by Age Group. *The Gerontologist*, **55**(1), 154-168.
- Freud, S. (1905). Drei Abhandlungen zur Sexualtheorie. In A. Freud, E. Bibring, W. Hoffer, E. Kris, O. Isakower (Eds.), *Gesammelte Werke, V, Werke aus den Jahren 1904-1905*, Imago Publishing Co., Ltd., London, 1942, Siebte Auflage, S. Fischer, Frankfurt am main, 1991. 渡邊俊之(訳)(2009). 性理論のための三篇. 新宮一成・鷺田清一・道籙泰三・高田珠樹・須藤訓任(編集委員). フロイト全集, 6, 1901-06 年. 岩波書店, pp.163-310.
- Freud, S. (1935). "Anonymous (letter to an American mother)," In E. Freud (Ed.), *The Letters of Sigmund Freud* (pp.423-424). United Kingdom: Hogarth Press.
- Grov, C., Bimbi, D. S., Nanín, J. E., & Parsons, J. T. (2006). Race, ethnicity, gender, and generational factors associated with the coming out process among gay, lesbian, and bisexual individuals. *Journal of Sex Research*, **43**(2), 115-121.
- 日高庸晴 (2024). LGBTQ+の健康レポート ―誰にとっても心地よい医療を実装するために. 医学書院.
- 平田俊明 (2014). レズビアン、ゲイ、バイセクシュアル支援のための基本知識. 針間克己・平田俊明 (編). セクシュアル・マイノリティへの心理的支援. 岩崎学術出版社, pp.26-38.
- Hall, W. J., Dawes, H. C., & Plocek, N. (2021). Sexual Orientation Identity Development Milestones Among Lesbian, Gay, Bisexual, and Queer People: A Systematic Review and Meta-Analysis. *Frontiers in Psychology*, **21**(12).
- Hooker, E. (1957). The adjustment of the male overt homosexual. *Journal of Projective Technique*, **21**, 18-31.
- Horowitz, J. L., & Newcomb, M. D. (2001). A multidimensional approach to homosexual identity. *Journal of Homosexuality*, **42**, 1-19.
- 葛西真記子 (2023). 心理支援者のための LGBTQ+ハンドブック ―気づき・知識・スキルを得るために. 誠信書房.
- Kenneady, D. A., & Oswalt, S. B. (2014). Is Cass's model of homosexual identity formation relevant to today's society? *American Journal of Sexual Education*, **9**, 229-246.
- Kinsey, A. C., Pomeroy, W. B., & Martin, C. E. (1948). *Sexual Behavior in the Human Male*. United States: W.B. Saunders.
- Kinsey, A. C., Pomeroy, W. B., Martin, C. E., & Gebhard, P. H. (1953). *Sexual Behavior in the Human Female*. United States: W.B. Saunders.
- Kosciw, J. G., Palmer, N. A., & Kull, R. M. (2015). Reflecting resiliency: Openness about sexual orientation and/or gender identity and its relationship to well-being and educational outcomes for LGBT students. *American Journal of Community Psychology*, **55**(1-2), 167-178.
- Liddle, B. J. (1996). Therapist sexual orientation, gender, and counseling practices as they related to ratings of helpfulness by gay and lesbian clients. *Journal of Counseling Psychology*, **43**, 394-401.
- Maguen, S., Floyd, F. J., Bakeman, R., & Armistead, L. (2002). Developmental milestones and disclosure of sexual orientation among gay, lesbian, and bisexual youths. *Journal of Applied Developmental Psychology*, **23**, 219-233.
- Malcolm, J. P. (2008). Heterosexually married men who have sex with men: Marital separation and psychological adjustment. *The Journal of Sex Research*, **45**, 350-357.
- Marcia, J. E. (1987). The identity status approach to the study of ego identity development. In T. Honess, & K. Yardley (Eds.), *Self and identity: Perspectives across the lifespan* (pp.161-171). New York, NY: Routledge.
- McCarn, S. R., & Fassinger, R. E. (1996). Revisioning sexual minority identity formation: A new model of lesbian identity and its implications for counseling and research. *The Counseling Psychologist*, **24**, 508-534.
- Meyer, I. H. (2003). Prejudice, Social Stress, and Mental Health in Lesbian, Gay, and Bisexual Populations: Conceptual Issues and Research Evidence. *Psychological Bulletin*, **129**(5), 674-697.
- Meyer, I. H. (2015). Resilience in the study of minority stress and health of sexual and gender minority persons. *Psychology of Sexual Orientation and Gender Diversity*, **2**(3), 209-213.
- Mohr, J. J., & Fassinger, R. E. (2000). Measuring dimensions of lesbian and gay male experiences. *Measurement and Evaluation in Counseling and Development*, **33**, 66-90.

- Mohr, J. J., & Kendra, M. S. (2011). Revision and extension of a multidimensional measure of sexual minority identity: The Lesbian, Gay, and Bisexual Identity Scale. *Journal of Counseling Psychology*, **58**(2), 234-245.
- Parks, C. A. (1999). Bicultural competence: a mediating factor affecting alcohol use practices and problems among lesbian social drinkers. *Journal of Drug Issues*, **29**(1), 135-154.
- Parks, C. A., & Hughes, T. L. (2007). Age differences in lesbian identity development and drinking. *Substance Use and Misuse*, **42**(2-3), 361-380.
- Rado, S. (1940). A critical examination of the concept of bisexuality. *Psychosomatic Medicine*, **2**, 459-467.
- Rado, S. (1949). "An adaptational view of sexual behavior," In P. H. Hoch and J. Zubin (Eds.), *Psychosexual Development in Health and Disease* (pp.159-189). New York: Grune and Stratton.
- Reynolds, A. L., & Hanjorgiris, W. F. (2000). "Coming out: lesbian, gay, and bisexual identity development," In R. M. Perez, K. A. DeBord, and K. J. Bieschke (Eds.), *Handbook of Counseling and Psychotherapy with Lesbian, Gay, and Bisexual Clients* (pp.35-55). United States: American Psychological Association.
- Rosario, M., Meyer-Bahlburg, H. F., Hunter, J., Exner, T. M., Gwadz, M., & Keller, A. M. (1996). The psychosexual development of urban lesbian, gay, and bisexual youths. *The Journal of Sex Research*, **33**, 113-126.
- Rosario, M., Schrimshaw, E. W., & Hunter, J. (2004). Ethnic/racial differences in the coming-out process of lesbian, gay, and bisexual youths: a comparison of sexual identity development over time. *Cultural Diversity and Ethnic Minority Psychology*, **10**(3), 215-228.
- Rosario, M., Schrimshaw, E. W., & Hunter, J. (2006). A model of sexual risk behaviors among young gay and bisexual men: longitudinal associations of mental health, substance abuse, sexual abuse, and the coming-out process. *AIDS Education and Prevention: Official Publication of the International Society for AIDS Education*, **18**(5), 444-460.
- Rosario, M., Schrimshaw, E. W., & Hunter, J. (2011). Different patterns of sexual identity development over time: Implications for the psychological adjustment of lesbian, gay, and bisexual youths. *Journal of Sex Research*, **48**, 3-15.
- Rowen, C. J., & Malcolm, J. P. (2003). Correlates of internalized homophobia and homosexual identity formation in a sample of gay men. *Journal of Homosexuality*, **43**, 77-92.
- Sandfort, T. G., de Graaf, R., Bijl, R. V., & Schnabel, P. (2001). Same-sex sexual behavior and psychiatric disorders: findings from the Netherlands Mental Health Survey and Incidence Study (NEMESIS). *Archives of General Psychiatry*, **58**(1):85-91.
- Savin-Williams, R. C. (2005). The new gay teenager. Cambridge, MA: Harvard University Press.
- Savin-Williams, R. C. (2011). Identity development among sexual-minority Youth. In S. J. Schwartz, K. Luyckx, & V. L. Vignoles (Eds.), *Handbook of Identity Theory and Research Vols 1 & 2* (pp.671-689). New York, NY: Springer.
- Savin-Williams, R. C., & Cohen, K. M. (2015). Developmental trajectories and milestones of lesbian, gay, and bisexual young people. *International Review of Psychiatry*, **27**, 357-366.
- Savin-Williams, R. C., & Diamond, L. M. (2000). Sexual identity trajectories among sexual-minority youths: Gender comparisons. *Archives of Sexual Behavior*, **29**, 607-627.
- Socarides, C. (1968). The Overt Homosexual. New York: Grune and Stratton.
- Sophie, J. (1986). A critical examination of stage theories of lesbian identity development. *Journal of Homosexuality*, **12**, 39-51.
- Troiden, R. R. (1979). Becoming homosexual: A model of gay identity acquisition. *Psychiatry. Journal for the Study of Interpersonal Processes*, **42**, 362-373.
- Troiden, R. R. (1989). The formation of homosexuality identities. *Journal of Homosexuality*, **17**, 43-73.
- Weinberg, T. S. (1984). Biology, ideology, and the reification of developmental stages in the study of homosexual identities. *Journal of Homosexuality*, **10**, 77-84.

（教育支援機構奨励研究員 臨床心理学コース 博士後期課程3年生）

（受稿 2024 年 9 月 2 日、改稿 2024 年 11 月 18 日、受理 2024 年 12 月 19 日）

本研究は JST 次世代研究者挑戦的研究プログラム JPMJSP2110 の支援を受けたものです。

性的マイノリティ（LGB+）に関する 性的アイデンティティ発達研究の概観

一段階モデルからマイルストーン研究への潮流変化に着目してー

上田 裕也

性的マイノリティは慢性的な差別や偏見にさらされるマイノリティ・ストレスを抱えやすく、心理的支援の重要性が指摘される。心理臨床実践では、従来、性的アイデンティティ発達にかかる線形かつ単一の段階モデルが多く参照されてきたが、多様な発達経路を持つ個人差を十分説明できていないとの批判があった。近年、重要なライフイベントをマイルストーンと位置付けてそのタイミングや順序を調査し、さまざまなパターンとその要因を検証するマイルストーン研究が増加している。マイルストーン研究の増加の背景には、多様性への社会の受容の高まり、実態に即した母集団の把握を可能とする調査手段の向上、個人差に着目する研究方法の登場が考えられる。本稿では、性的アイデンティティ発達研究における段階モデルからマイルストーン研究への潮流を概観した。今後の課題として、交差性を重視した実証的研究、発達経路の個人差を踏まえた心理臨床実践の充実が求められる。

An Overview of Sexual Identity Developments Research among Lesbian, Gay, and Bisexual+ : Focusing on the Shift from Stage Models to Milestone Studies

UEDA Yuya

Sexual minorities are subject to minority stress, which is characterized by chronic exposure to discrimination and prejudice. The necessity of psychological support for this demographic has been well documented. In clinical psychology, the prevailing model of sexual identity development is a linear single-stage model. However, this model has been criticized for its inability to adequately explain individual differences, particularly in cases of diverse developmental pathways. In recent years, an increasing number of milestone studies have been conducted to investigate the timing and sequence of important life events by positioning them as milestones and examining various patterns and factors. The rise in milestone studies can be attributed to three factors: society's growing acceptance of diversity; improvements in survey instruments that enable a more realistic understanding of the population; and the emergence of research methods that focus on individual differences. This paper reviews the trend from stage models to milestone studies in sexual identity development research. Future challenges include empirical research emphasizing intersectionality and the enhancement of psychological clinical practice taking into account individual differences in developmental pathways.

キーワード：性的マイノリティ、アイデンティティ発達、マイルストーン研究

Keywords: Sexual and Gender Minority, Identity Development, Milestone Study